秀賞

部長になって気づいたこと

青森県立三本木高等学校附属中学校
三年　氣田　菜那

「私たちは、十一人で部長だから。」

この言葉が心の奥にとげが刺さったようにずっと引っ掛かっていた。

私が所属している吹奏楽部は、コンクールが終わると、コーチや顧問の先生方、三年生などの話し合いによって次の部長が指名される。去年の九月、私は部長をすることになった。大好きな吹奏楽部の代表として選ばれたことが純粋に嬉しかった。

その後、二年生だけで一年間の目標や計画についてミーティングをしている時だった。うまくまとめられていなかった私に、友達は笑顔で言ってくれた。「私たちは、十一人で部長だから。」と。これは心から心配してくれて、優しさを込めてかけてくれた言葉だと、頭では分かっていた。しかし、私が返した「ありがとう。」は本当の言葉ではなかった。理由は、私が憧れている人にある。その人は、私が一年生だった頃の部長だ。先輩は楽器が抜群にうまいことに加えて、勉強もできた。そして、周りを引っ張っていくカリスマ性もあり、普段の行動や大勢を前にした挨拶もハキハキとしていて、おまけにパートの違う私にも笑顔で話しかけてくれる優しさまであった。そんな、一人で全てをこなしてしまう完璧さが本当に格好良くてキラキラして見えた。そんな存在になりたい、ならなくちゃいけないと意気込んでいた矢先、友達の言葉で出ばなをくじかれた思いだった。きっと友達はそんなつもりではないが、私は十一分の一の存在だと言われているような気がして、優しい言葉を嬉しく思えなかった。

私は一人で完璧な存在になるんだ、という漠然とした目標を持ってむやみに頑張った。しかし、あまりうまくはいかず、どんどん自己嫌悪に陥った。他の人が部長のほうが良かったんじゃないか、自分がいないほうが部活がうまくいくんじゃないか、と思いこんで何度も一人で泣いた。

コンクールの少し前、三年生になった私たちは意識を再確認するために、またミーティングをした。「この際だから、今部活に思っていることを全部言おう。」と誰かが言ったのを皮切りに、一人ずつ頑張っていく決意や悩んでいることを話していった。私の番がくると、口から溢れてくるかのように、今まで一人で悩んでいたことを話してしまった。人前で弱さをさらすのは完璧から遠ざかることだと思っていたが、抑えきれなかった。みんなは私のありのままの言葉を真剣に聞いてくれて、口々に言ってくれた。「もうちょっと自信持ちなよ。」「すごく頑張ってると思うよ。」「菜那には菜那のいいところがあるよ。」一言一言が心の底から嬉しくて、今まで一人で暗くなっていたのが嘘だったかのように心が軽くなった。

そのとき、はっとした。ずっと引っ掛かっていたあの言葉の本当の意味が分かったからだ。「十一人で部長」は、きっとこれだったんだ。一人一人は少しずつ欠けていて完璧じゃないけれど、みんなで励ましあったり支えあったりするからこそ完璧に近づいていけるのだと。大分遅くなってしまったけれど、みんながいたからこそ気付けたのだと思う。心の奥に刺さっていたとげはいつの間にか消えていて、私は本当の意味で部長になれた気がした。

結局、コンクールでは私たちが掲げていた夢を叶えることはできなかった。後悔が無いといったら嘘になるが、今年のコンクールシーズンが嫌だったかと聞かれたら、自信を持って「いいえ。」と答えられるだろう。

私は部長になってたくさんのことに気付かされた。自分は一人じゃ何もできないこと、悩んで暗くなってもいいことは一つもないこと、そして私を助けてくれる人がたくさんいること。もしも、私が一年前に部長になっていなかったら、二年半前に吹奏楽部に入っていなかったら、今の私はいなかったと思う。それくらい、今の仲間とこの一年を過ごして変われたと思う。私が信頼している人たちが「大丈夫だ。」と言ってくれるから自分を信じられるし、ずっと嫌っていた自分のことも少しは好きになれた。「私たちは、十一人で部長だから。」この好きじゃなかった言葉も今では大切で大好きな言葉だ。

本当に、心の底から、みんなありがとう。

面と向かって伝えるのは少し照れくさいから、今はみんなに見つからないようなところに書いておく。でも、いつか絶対に伝えよう。私を支えてくれて、そして変えてくれた人たちに、精一杯の「ありがとう。」を。